

先の解散総選挙では、生存本能を丸出しにして、政治信条すら変節させる政治家の往生際を垣間見た。そして、棚からボタ餅的に脚光を浴びた、社民党や民主党由来の「リベラル」が息を吹き返してしまった。

そもそも世間受けしやすい「リベラル」などという呼称は、本来の語義が変節した、日本ならではのカテゴリーだ。どこかスマートな印象を与えるマニフェストという言葉もそうだが、メディアの劇場演出や、それに踊らされる振れ幅豊かな投票行動にも責任の一端はあるのだろう。

イデオロギーや政策の違いなど、本質的な意義において、政治勢力を分類するならば、保守は、「小さな政府」を志向する使用者の味方であり、革新（リベラル）は、「大きな政府」で再分配を図る労働者の味方である。

米国は民主党、英国は労働党、実に明快でわかり易いLIBERALだ。

ただ、日本のリベラルとの決定的な違いは、国益のためには空爆も辞さず、核兵器をも保有する軍事プレゼンスを「国家として当然の行動」と認識している点だ。環境や雇用、社会保障といった政策がLIBERALなのである。

日本のリベラルは、イデオロギーや政策の基準が根本的にズレている。その本丸は、改憲反対にあり、他国並みの現実的選択を戦前回帰と揶揄し、盲信的に軍隊や安全保障政策を否定してしまう。なぜか堂々と「アメリカは出ていけ」とも言わないし、リベラル流に言えば、タカ派軍国主義の中国や韓国にも、批判どころか肯定的な人たちが

## 『怪しいリベラル (LIBERAL)』

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

もある。先進各国の核兵器や軍隊には寛容で批判すらしらないのに、自国の抑止力には眉をひそめる。

これはもう日本固有の「非現実的な平和盲信」でしかない。

LIBERAL DEMOCRATIC PARTY: 「自民党」のことだ。

実際、族議員や派閥政治に代表される再分配は、LIBERAL(大きな政府)そのものであり、それを抵抗勢力とした小泉改革(小さな政府)も今や昔、賃上げ要請や働き方改革など、自民党はLIBERALに寄り添っている。

耳に優しい言葉や、怪しい世論に寄り添う姿勢を見せなければ、たちまち手痛いお仕置きを受けてしまうからだ。つまり、日本の政治勢力全てがリベラルであり、その点において対立軸は存在せず、イデオロギーや政策に明確な違いはないということになる。敗戦というトラウマから無理矢理生み出した「違い」が、軍隊や安全保障の否定だったのかもしれない。

万人が否定し難い「平和」という言葉を盾にして、盲信的に軍事力を否定することで、国民の思考から「健全な抑止力」を奪ってきた。

そして、新聞を読まないLIBERALな若者ほどその現実気づき始めている。

日本固有の怪しいリベラルは、妄想に近い幻想に過ぎない。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
『雲涯蒼天』  
定価700円  
Amazonにて販売中